

如意輪観音坐像

寺院の伝説によると、書寫山に到着して間もなく、圓教寺の開祖性空上人（910-1007）は、一本の桜の周りを舞い踊りながら神聖な偈文を詠じている天女を目撃した。天女の偈文は、生きてある木の姿の菩薩で、慈悲の六臂如意輪観音（サンスクリット語：チインタ・マニ・チャクラ）を讃えていた。偈文によると、如意輪観音は長寿と繁栄をもたらし、すべての衆生にいつでも極楽浄土で生まれ変わると保証していた。この偈文に触発されて、性空上人は桜の木に如意輪感のお姿を彫った。この像は 1492 年に焼失した。現在の像は摩尼殿の中央櫃に保管されており、元の像に非常に似ていると言われている。1239 年に僧妙覚によって彫られた。この後継の像は鎌倉時代初期（1185～1333 年）の芸術性に富んだ優れた作品の一つと考えられている。

六臂如意輪観音は、すべてに救いの手を差し伸べるために、ヒンズー仏教の六道をそれぞれ表す 6 本の腕で描かれている。如意輪の意味は、文字通り「希望の環」と解釈でき、如意輪観音が描かれている 2 つの対象物を指している。左手には、煩惱を破壊する宝輪を、右手には願いを叶える宝珠を持つ。これらの宝は、観音様がすべての衆生を苦しみから解放するという本願を表している。もう 1 つの手は蓮をお持ちになり、これは、泥だらけの池から蓮が成長するように、靈的修行を通じて自分の存在を超越するすべての衆生の能力を象徴している。像の右側の手は、指を顎にそっと寄せ瞑想する姿を表現している。

如意輪観音像は円錐形の王冠を被り、無量光仏である阿弥陀如来を示唆している。胴体と王冠は黒い漆で仕上げられており、打掛は宝輪と精巧な幾何学模様で装飾されている。観音菩薩の霊場と言われ補陀落山を表すむき出しの岩に、右膝を上げ、左足に載せる如意輪観音独特の姿勢を見せている。